

# 黄泉国・根堅州国

## 神話の一考察

野 中 久 子

### 序 論

従来、黄泉国・根堅州国をいずれも単に地下にある空想上の世界とするような見方が行われており、黄泉国も根堅州国も同一觀念の世界の如く考えられているが、果してこれを簡単に同一觀念の世界として処してよいものだろうか。黄泉国は、伊耶那岐命が死なれた伊耶那美命の後を追うて訪ねられた所であり、根堅州国は須佐之男命が伊耶那岐命から治めるように言われた海原を不満として妣の国根堅州国に行きたいと言われた所、並びに大国主命が須佐之男命の女、須世理毘売と結婚される所に於いて展開される神話である。古事記の梗概からすれば、これら二つの国は如何なる觀念のものであるか詳かではないが、それらの各々の細部を考察していくと、片方は何か暗黒のじめじめした国が連想でき、他方は生々として明るい頬笑ましいものが感ぜられ、必ずしも両者が同一觀念のものであるとは断定しがたい。今この黄泉国・根堅州国について大言海の説明をみると、黄泉国 $\equiv$ 人ノ死シテ、其靈魂ノ行ク処ト云フ。魂ノ行ク国。…ネノクニ。幽界。根堅州国 $\equiv$ ねのくに $\equiv$ 同ジ。上代二人ノ死シテ、魂魄ノ往クト云フ国ノ稱。ヨ

モツクニ。ヨミノクニ。という如くに両者は互に相通するようにならされている。私はこの大言海の説明をそのまま領く事が出来ない。この黄泉国・根堅州国神話の内容は或観点から見れば類似点が見られ、亦他面では相違があるという工合に、類似・相違の複合化によつて、一つの物語が形造られているという複雑なものである。そこで私はこれら両神話の間に類似も見られるが、同時に亦矛盾している点もある事について、古事記を中心として考察していき、その中から少しでも黄泉国・根堅州国の觀念に近いものを導き出せたら幸いだと思う。

### 本 論

#### 一、両神話の類似点と相違点

伊耶那岐命を中心とする黄泉国の神話と大国主命が活躍する根堅州国の神話とが互に相似た要素を持つていこう事はこの物語自らが語つていっている所であるが、一体これらの神話の如何なる所にそれが見られるかを物語の展開順序に従つて見ていこうと思う。その類似点として、(1)別離と逢合の差はあるが共にその物語の中心人物となるものが男と女である事、(2)それぞれの国に着くや、両神話ともすぐ女に逢合している事、(3)両神話に呪的要素が豊富で、その占める位置が大きい事、(4)千引石、五百引石の事、(5)黄泉比良坂の存在及び宣言、(6)宣言の結果の敘述、(7)附加的

説明がなされている事、があり、相違点として、(1)黄泉戸  
喫の事、(2)覗き見のタブーの事があげられる。以上の類似  
点と相違点を考え合わせて言える事は、いずれも異郷の地  
を訪れ、その世界の一部を見、その世界からのがれるとい  
うもので、異郷説話と逃走説話がその中心となつていろら  
しい。両神話には全体として、又小部分に於いて類似点が  
見られるので、その性格まで両神話は異郷として、同じも  
ののように考えられているようである。黄泉比良坂の存在  
や五百引石、千引石に至つては全く同じものである。これ  
からみて、両神話には自ずと何か関連性が浮び上つてくる  
のである。しかしこれら神話の大きな相違点即ち黄泉国は  
伊耶那美命が死なれた後で伊耶那岐命が逢いたいと思われ  
て訪問された国であるに對し、根堅州国は須佐之男命が高  
天原から放逐されて行かれた国で、八十神に殺され御祖の  
命により生き返らせられた大國主命が訪問された国で、こ  
こには死後の世界を感じしめるものはないし、須佐之男命  
も死んでこの国に行かれたのではあるまいと思われる。こ  
のように考えると、一方は死の国、他方は生の国となり、  
全然異つた性格のものであるように思える。この事は「古  
代人の想像力は論理的法則に導かれていず、個々のものを  
統括し構成する力は比較的弱かつた。此の故に全体の統括  
をどうかすると、危くするような矛盾が見出される。」と  
いう事から生じたものであろう。根堅州国の神話に密接に

黄泉国の要素が加わるのは、須佐之男命が「僕は妣の国根  
堅州国に罷らむ。」と言つた所にある。根堅州国について  
は多様な考え方があがあるが、次田氏は「此の段の神話は、須  
佐之男命が出雲へ下られる前提となつているので、高天原  
の神話から出雲神話に移る神話進行上の重要な事柄とな  
つていように思われる。然るに此所に一つの問題となる  
のは、死国なる根国が出雲と混同されている事である。上  
代人の未来観では、死後の国は現実世界と隔絶しては居る  
が、やはり此の世界の一部、又は何処か辺鄙な地に在るも  
のとする觀念があつたのであろう。」と述べておられる。  
この事と黄泉国神話に於いての「そのいはゆる黄泉比良坂  
は今の出雲の国の伊賦夜坂をいふ。」とあるのよりすれ  
ば、黄泉国も根堅州国も出雲国に結びつけて觀ぜられてい  
る事が分る。このように両神話の間に「出雲国を介入する事  
により、亦同時に未来に對する考え方を知る事によつて、  
謎の鍵を解く事が出来ると思ふのである。」

註1 和辻哲郎著「日本古代文化」四九頁

註2 次田潤著「古事記新講」八四頁

二、出雲系神話の一面—古事記の内容よりみて—

黄泉国・根堅州国はそれぞれ出雲の国と関連づけて考え  
られているようであるが、それがどうして出雲の要素を加  
えていつたかと言えば、古事記の内容というものが自ずと

出雲に結びつけていつた感がある。それが何故に出雲という特殊な地域に結びつくのか、その神話の展開過程を見てみると、<sup>(註1)</sup>黄泉国―出雲国―根堅州国という関係が意識的或いは無意識的に表われており、述作者が黄泉国・根堅州国という異郷を出雲に想定していたらしい事が伺われるのである。神代に於いては『死者の住む黄泉国は暗黒且つ穢れた世界であり、悪靈邪鬼の根源地と信じられてゐたのだから、この世界は大和朝廷にとつて好ましからざる存在である出雲とが神話の上で結合』<sup>(註2)</sup>したのだとみられる。亦黄泉比良坂は『夜見の入口であつて、今の出雲の伊賦夜坂が之に当ると記してあるのは、原始宗教や神話や人類学などの上から見て、斯様に信じて居つたとしても差支へはない。神話・伝説の上には斯くあるべきことで、彼の伊賦夜坂は、古くから民衆によつて黄泉国の入口として、当てはめられて居たことが分る。』<sup>(註3)</sup>「だろうし、『少くとも民間信仰的には黄泉国が、その所在の関する限り、出雲国と結びつけて観ぜられてゐたことを示してゐる。』<sup>(註4)</sup>などと、それぞれ伝説上或は民間信仰的な方面から、それらの結びつきを述べておられる。根堅州国と出雲との結びつきは須佐之男命が誓約で勝つた時、種々の乱暴を働いたので、高天原から放逐される事になるが、その時高天原より降られた所が出雲の国になつてゐる。これにより須佐之男命と出雲の国とは切り離せない関係を持つに至るのである。また須佐之男命

が伊耶那美命の妣国根堅州国を恋いたされた所と、伊耶那岐命が伊耶那美命のいられる黄泉国を訪問された所とが同一場所のようにも見られる。須佐之男命は出雲で大蛇退治後、クシナダ姫と結婚するが、その後この神の系統を引いて大国主命が生れ、大国主命の根堅州国神話が展開される。この神話で出雲と関連性がつけられるのは黄泉比良坂の存在であり亦宇迦の山の山本なる地名等にみる事ができる。こうして伊耶那美命―黄泉国―出雲国―須佐之男命―根堅州国という関係が出雲をその中心として形成されてくるらしい。これを裏面から見るならば『イヅモがヨミと特殊の関係があるやうになつてゐるために、イヅモに縁の深いサソノの命がヨミにゆくことにせられたのであらう。』<sup>(註5)</sup>と考えられる。黄泉国は汚穢の國。悪の根源地という性格を持ち、且つそこには荒ぶる神の存在が考えられていた。この荒ぶる神は土着の民族で皇室に反抗していたことから、皇祖神から排斥されて、どちらかと言えばじめじめとした観想を持つてゐるようだ。ここに出雲が政治的に圧迫されてゐる事を感じしめるものがある。津田氏はイヅモとヨミの関係を『オホナムチの命は現し国の人物としての神であるけれども、日の神の権威に服従しない荒ぶる神であるといふ点では、現し国の主たる光明の神の反抗者であつて、それはおのづから闇黒の國としてヨミの觀念と連結せられる。神代史の述作者は此の聯想を利用して、イヅモを

ヨミに結合したのではあるまいか。……それとヨミとの結合は単に外部的なものであり、神代史の述作者が強ひて施した色彩に過ぎない。<sup>(註6)</sup>』と両者の闇黒を共通として生じた連想であり、それを外部的に結びつけられたと述べておられる。

註1 古事記の内容の展開は、枚数の関係で省略した。

註2 守屋俊彦「黄泉國訪問説話について」(「国語国文学」才二十三卷才二号)三五頁

註3 鳥居龍藏著「人類学上より見たる我が上代の文化」一三七頁

註4 松村武雄著「日本神話の研究」才四卷三四四頁

註5 津田左右吉著「日本古典の研究上」四二七頁

註6 同上書 五八三頁

三、出雲系神話の一面(二)——その洞窟観について——

津田氏の如く黄泉を出雲に結びつけていつたのは、神代史の述作者が強ひて施した色彩に過ぎないと見る事が出来るとしても、述作者がこのような関連づけをするには、やはり背後に何かの要素があつたものと思う。私はこれを歴史性と見たい。神話の歴史について松村氏は『神話』なるものは、それがいかに空想的な内容から成つていように見えるものと雖も、究竟するところその構成要素は、(1)人間社会に於ける現実的・実際的経験。(2)這般の現実的・実際的な事実・経験そのものではないが、しかしそれらから

示唆せられ描き出された観念的事実。(3)這般の現実的・実際的な事実・経験が誇張せられ、若しくは誤解せられたところに發生する諸相。の何れかが神話的思考によつて観ぜられ解釈せられたものであり、而して決してそれ以外の何物をも含有していない。<sup>(註7)</sup>』という見方をしておられ、それが妥当であると思う時、これら神話に於いても、松村氏の言われる要素を背景に持つていと信ずるのである。その背景の裏付けの一端ともする為に出雲風土記を登場させようと思う。両神話の中で出雲との関係を深めたものは黄泉比良坂の事であつた。この黄泉比良坂が今の出雲の國の伊賦夜坂であるという古事記の説明の場所として、出雲郡宇賀郷が考えられ、出雲風土記に以下の記載がある。「此の海浜に磯あり。腦の磯と名づく。高さ一丈ばかりなり。松生ひ、莖りて磯に至る。單人の朝夕に往来へるが如く、又木の枝は人の攀ち引けるが如し。磯より西の方に窟戸あり。高さ広さと各六尺ばかりなり。窟の内に穴あり。人入ることを得ず。深き浅きを知らざるなり。夢に此の磯の窟に至れば必ず死ぬ。故、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂、黄泉の穴と号く。」とあり、亦伊賦夜坂にしても、意宇郡に「伊布夜社」としてその名残をとどめている。この伝承により出雲地方に黄泉の觀念があつた事が分り、その觀念が彼等と近隣した所にある洞窟となつて表われ、その窟の近くに行くと、人が必ず死ぬという一種の靈力の如

きものが観ぜられていたようである。この伝承の地、宇賀郷は根堅州国神話に於いて、須佐之男命が宣言された「ウカの山の山本に宮柱を立て、大空に高く棟木を上げて住めよ。」と言われた場所と一致するのではないかと思う。次に彼等が黄泉の觀念として洞窟を描いていたとすれば、洞窟観というものに触れねばならない。出雲風土記には先にあげた例の他に、嶋根郡勝間崎、加賀神崎、楯縫郷等にも洞窟について著しているが、その事は彼等が洞窟に対し関心を持つていた事の証となるだろう。嶋根郡の条の「此の嶋より伯耆の国郡内の夜見の嶋に達するまで、磐石二里ばかり、広さ六十歩ばかり、馬に乗りながら往来ふ。」の伝承には、この洞窟をずつと行けば黄泉国にたどり着ける様な感を持たせる。無限の世界でのつながりがある様に思われる。折口氏は『夜見国・大根島などを夜見の国・根の国に聯想した先人の考へも、地方から近きに過ぎる様に思はれるが、島を死の国と見た処は、姑らく棄て難い。』と述べていられるのも、洞窟が死者の行く所と当代の人が考え且つ恐れていたという觀念の表出であると思われる。これらからすれば古代人は冥界として、最初期には洞窟を考えていたという事ができる。次田氏はこの神話と横穴式石室とを比較して解釈されている。確かに神話が『歴史的名ものを、文学的なものとして表現してゐることが考へられる。』とすれば、黄泉国・根堅州国神話に次田氏の言う横穴

式石室の構造を反映していたかも知れない。それが更に文学的に述べられたとみられるが、この考えはより後期的解釈と言わねばならない。風土記にある伊賦夜社、夜見島等又その地方の洞窟観からみて、黄泉国の觀念は出雲地方の伝承であるように思われる。出雲では靈界の初期的なものを暗黒の洞窟の中に見出したのである。この出雲人の考えが基となつて、古事記が述作される時代に近い六世紀前後に盛んになつた横穴式古墳が反映し強く打出された為に本来の黄泉国観は薄れたのだと思う。出雲系神話は全体として陰暗な色調が感じられる。それは彼等が高天原系の民族に対抗しつつ、圧迫されていると言う精神面から醸し出されるものであろう。亦彼等の死後の異郷とする洞窟観や、黄泉国・根堅州国が出雲の国と関連づけられたりした觀念が一緒になつて、地下の色調を持つようになる。次に一歩進んで古代人が抱いていた異郷について、特に出雲国が地下の要素と結びつき、それがこれら神話の異郷と何故に近接していくのかという事を考えてみたい。

註1 松村武雄「日本神話の実相」一三五頁

註2 折口信夫著「折口信夫全集」才二卷 三二頁

註3 志田延義「歴史、文学、哲学と神話」(「国語と国文学」才十三卷才二号) 一一九頁

四、異郷観について

大体異郷というのはその意識の進展として、『此処にわれわれの経験に這入つて来たもの、又は這入ることが出来るものとしての他国とわれわれの経験を超越して、空想的の存在としての他郷とがある。』とすれば、この後者の存在として黄泉国・根堅州国、それに対応するものとして、高天原・海神国・常世国が考えられる。これらの異郷は葦原中国を中心として、それより上に高天原が、それより下に黄泉国が位置するという垂直的表象の仕方と葦原中国を起点として水平的、地下的な位置に根堅州国や常世国の観想があつたようだ。葦原中国を『此国土、就中出雲方面の呼称である。』<sup>(註2)</sup>と言ひ得れば、垂直的・水平的表象の交叉点に於いて黄泉国・根堅州国はその近似点にあつたと見る事ができる。『出雲民族は神々の世界をこの国土に観ずると共に、死界としての冥府をも亦この国土の幽僻の境に想定していた』<sup>(註3)</sup>という事を思えば、出雲人の冥府として考えられたのは洞窟であろう。彼等はそれを国土と平行している遠い所にあると感じていた。だがその国の性格がどんなものであるかははつきりせず、その観想ははなはだ粗樸なものである。この様な観想しか持たなかつた原因として、日本人の性情の特徴からみて『宇宙終局といふやうな、反生々的な非現実的な事柄への関心を妨げたであらう。且つまた国家、皇室を中心とする建国的図像を神話的に彫み上げようとした民族精神も亦、かうした観想を悦ばなかつたであらう。』<sup>(註4)</sup>という事をあげておられる。この考えがあつ

たからこそ、高天原系民族は自分達民族からすれば排斥したい立場にある出雲民族をその観想に結びつけて、彼等が住む出雲全体を穢れの世界としたのではなからうか。この考えと洞窟観がつがなり、当代の古墳の連想によつて、出雲と黄泉とは関連性を増してきて、互に重なり合つていつたのではなからうか。出雲系民族の持つ宗教性に高天原系民族が政治的に添加して言つたと思える。根堅州国も出雲人が抱いていた観想らしいがこれには何か、明るい性格のものがあつた。松村氏はこの根堅州国の観想として、我が国民間に存する二つの特殊世界、ニライ・カナイとみみらくの島の観念・信仰の表われであるとみておられる。この神話には悪・汚穢の世界となるものは全然表われてなく、出雲人のあこがれの国であつた感がある。そこには折口氏の言うように自ずと常世国とも関連してくるものがある。とこよと根の国とは同じ観想だつたが、とこよが理想化され、根の国が死の国という様に固定し、両者が別れてきた頃、高天原系民族が考えていた未来観と結びつけられて、黄泉国と根堅州国が同じような異郷を表わすものと見られたのではなからうか。この結びつきに出雲を持ち出したのは古事記の述作者の作意と思われる。こうして両者は結びつけられていくが、やはり各々の観想は違うものであるから、それが神話中にも跡を残していたと言えるだろう。

註1 折口信夫著「折口信夫全集」二十卷 八五頁

註2 松岡静雄著「日本古語辞典」

註3 松村武雄「古事記大成5」

註4 松村武雄著「民族性と神話」三九八頁

### 結論

これまで黄泉国神話と根堅州国神話との間に類似性が見られる為、両者が混同して解釈されているのを疑問として、両神話の類似点や相違点について考え、亦両神話に於ける出雲的要素、地下的要素、異郷觀等に触れてきたが、最後に「死」というものに視点を向けたい。黄泉国神話・根堅州国神話は共に「死」に関係した神話であると見る事ができる。死者の行く地下の世界として黄泉国があり、儀礼的な仮の死の世界として根堅州国が考えられていたと思う。それはフレイザーのいう『多くの未開民族、それも特にトーテムズムをもつてゐるものでは、年ごろに達した若者に対して、或る入団式を執行する慣習があり、その儀典のうちで、最も普通なのは、若者を殺して再び復活させる所である。』<sup>(註1)</sup>に当てはまるものと思う。即ち大國主命の死は滅亡を意味する「死」そのものではなく、儀式的な一時的な死である。このような性質をもつ根堅州国神話が妣国根堅州国(記)根国(紀・古語拾遺)底、根之國(紀)根國底之國(祝詞)極遠之根國(紀)下津國(祝詞)というようにさまざまに表記されて、それが多分に地下的要素を感じしめた事により、それが黄泉国という死後の世界の觀想に結びつけられたのであろう。更に「死」というものが出雲の国の性格に関連づけられていく様になつた為、その内容に類似が見られるのだと思う。亦一方は垂直的表象觀

念に於いて、他方は水平的表象觀念に於いて、互に近似の關係にあつた所から、これに出雲の政治的・宗教的な要素が強く附会されて、この両者の神話が出雲に結びつけられていくようになった。ここに於いて黄泉国・根堅州国が類似の觀想を持つようになり、それらの本来の姿が忘れられていくようになったのだと思う。いづれにしても、この両者の当初の姿は相当距りを持つものであつたらう。この距りは古事記の皇室中心の考え方が礎となつて縮少していつたと思われる。即ち皇室中心の述作は黄泉を出雲に結びつけたのである。それに根堅州国という出雲人の觀念世界が古事記の編纂時代頃に黄泉と同じ異郷とする見方が行われたが、それがまだ固定していなかつた為、その肝心な所に於いて、大きな相違を見るに至つてゐる。究極の所、根堅州国は出雲人が空想的に抱いていた未来の世界であり、黄泉国は古事記の編纂時代に最盛であつた古墳からの連想を主とするものから生じた死後の世界と言へるだろう。この黄泉国・根堅州国神話に類似性が見られるのは、古事記の内容にそう思わしめるものが備わつていたからであると言えよう。換言すれば古事記の述作者が本来出雲系民族の宗教的世界であつた根堅州国に、高天原系族の觀想が多い黄泉国と同じような世界として、政治的に結びつけていたのであろう。そこから両神話の觀想に類似性が生れてきたものだと思う。

註1 フレイザー著「金枝篇」(四)  
永橋卓介訳